

す、但し宋史回鶻傳には

龐〔特〕勒自稱可汗、居甘・沙・西州

と記せり、龐特勒が甘州に居れりと曰ふは、新唐書に従ひたるものなるべけれど、之が沙州にも西州にも居れりと曰ふは、思ふに宋代に於て此等の地方に據りし回鶻を以て、漫りに皆龐特勒より起れりと見たるものに過ぎずして、據あるに非ず、甘州回鶻と西州回鶻とは其の出現の事情を異にすること上に見たるが如くにして、決して之を同一視すべきに非ず。

以上唐代に於ける回鶻の盛衰に就き、兩唐書回鶻傳の記載を主なる據として、其の有様を攷究せり、傳の示す所に従へば、鐵勒九姓を以て中心の勢力を作りたる回鶻は、其の勃興衰退の兩期を除きては、能く北方諸部を壓伏して南方唐に臨み、其の間僅に諸部の叛亂の生ずるものありしに過ぎざるが如くに思はるれども、實は其の隆盛時代に於ても、殆ど絶えず近隣諸部との間に戦を續けたるものにして、特に北方の黠戛斯、西方の葛邏祿、西南の吐蕃と争ひ、時に深く此等の領域を衝きたること無きに非るも、要するに此の如きは只一時的の現象に過ぎずして、大體セレンガ河系の河域を中心とし、興安嶺山脈以西、天山の東端及び阿爾臺山脈以東の間に勢を占めたるに過ぎざるを知るべし、只南方支那に對しては、時會々中唐以後、其の國勢衰退の期に際せしかば、初め救援の師を出したるを基として、最後に至る迄之を壓せしも、尙未だ充分に其の威力を發揮し能はざりしものゝ如し、而して傳に記さるゝ二百數十年の間は實に殆ど此等の争鬪を以て始終したるに外ならず。

此の一篇攷究する所の結果にして幸に大過無きを得ば、如何に兩唐書の回鶻に關する記載の不備にして、而して